

平成 30 年産米の作柄・品質と次年度対策

- ◇平成 30 年産コシヒカリの作柄は不良～やや不良、品質はやや不良～並で地域間・ほ場間差が大きかった。
- ◇平成 31 年産米は適正な収量と高品質を両立できるよう、土づくりと初期生育の確保を！

1 平成 30 年産米の作柄と品質

(1) 新潟県全体及び下越南〔北陸農政局（12月10日）公表〕

- 新潟県の作況指数は 95 で、「やや不良」となった。
- 当地域を含む「下越南」の作況指数は 97 で、「やや不良」となった。

(2) 新潟地域管内〔普及指導センターとりまとめ〕

- 推定収量は早生 570kg/10a で「並」、中生 480kg/10a で「不良～やや不良」、晩生 520 kg/10a で「不良～やや不良」となった。
- 管内 J A コシヒカリ 1 等級比率の平均は 81%（前年 89%）で、地域やほ場間ではばらつきが大きく、多くの地域で前年を下回った。主な格落ち要因は除青未熟、心白粒であった。また、一部地域では干ばつによる収量や品質の低下がみられた。
- こしいぶきは、出穂期前後が高温で推移し、収量は平年並となったが、1 等級比率は 82%（前年 90%）と前年を下回った。主な格落ち要因は心白粒、除青未熟であった。
- 新之助は、登熟期間を通して低温・日照不足であったが 1 等級比率は 98%（前年 88%）と高かった。主な格落ち要因は除青未熟であった。

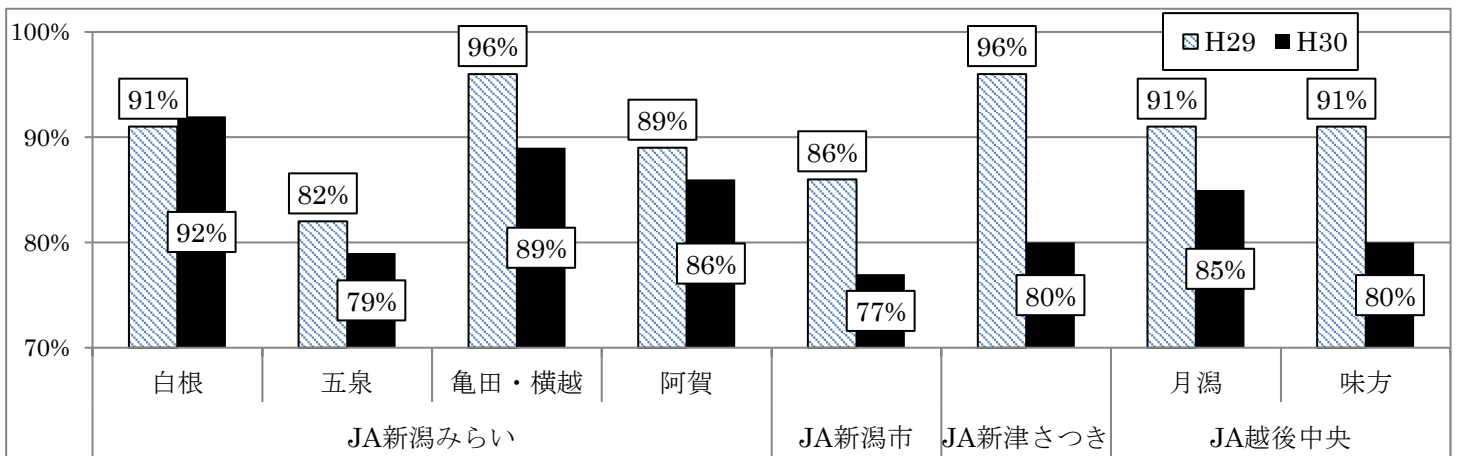


図 コシヒカリ(主食用)の年度・地域別 1 等級比率

2 平成 30 年産コシヒカリの収量・品質に影響を及ぼした要因と課題

(1) 収量

○プラス要因

・適正な穂肥の施用により、1 穂粒数が確保できた。

○マイナス要因

・移植直後の強風・低温・少日照による植え傷み、藻・表層剥離・ワキの多発生により初期生育が抑制されたこと等から、穂数減により総粒数がやや少なくなった。

・8 月第 6 半旬以降の低温・日照不足等により登熟が低下し、くず米が多くなった。

(2) 品質

○プラス要因

・葉色が薄い場合は追加穂肥施用により後期栄養を確保できた。

・登熟期間の飽水管理を徹底し、後期栄養を維持できた。

・台風被害が少なく、早期倒伏や倒伏程度多～甚の発生も少なかった。

○マイナス要因

・登熟後期の少日照や台風による強風・フェーンの影響等により登熟不良となった。

3 次年度対策～重点技術対策の実践～

		重点技術対策
稲づくり	1 適正な生育量の確保	<p>ア 早期に目標茎数を確保 (H30 年度は老化苗による植え傷みや初期生育不良がみられた) 育苗日数の適正化による健苗育成、移植前追肥の施用、好天日の田植え、適正な基肥量</p> <p>イ 過剰粒数の是正 適正な植え付け本数、適期中干し実施、溝切りの実施</p>
	2 後期栄養の確保	<p>ア 土づくりの実践(H30 年度土づくり資材の施用率は 35%と低水準) 土壌改良資材等の施用、稲がらの有効活用</p> <p>イ 深耕実施 作土深 15cm の確保</p> <p>ウ 生育診断に基づく適切な穂肥施用 出穂前後の適正な葉色維持、高温年の出穂前追肥・3 回目穂肥の実施</p> <p>エ 中干し後の適正な水管理の実施 中干し終了後から出穂期 25 日後まで飽水管理の徹底、フェーン時の湛水対応</p>
米づくり	3 適期収穫・適正な乾燥調製	<p>ア 適期収穫の実施 経営面積を考慮した品種構成と品種別作付面積の適正化、籾黄化率による収穫日の決定、フェーン等による立毛中の急激な乾燥時の刈遅れ防止</p> <p>イ 適正な乾燥調製の実施 乾燥温度・速度の調整による胴割粒の発生防止、適正な調製による未熟粒・被害粒の除去と籾混入の防止</p>